

# 第14回「日本語大賞」

テーマ 私が<sup>だいじ</sup>大事にしている言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「まだまだ増える『大事な言葉』」

北海道

札幌市立向陵中学校

三年 堀山 直浩

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

本を読んでいる時に不思議な事が起きる。僕の知りたかったことや、悩みの解決秘策が、魔法のようにそこに見つかるのだ。小説だと、登場人物の中、主人公が解決してくれることもあれば、主人公とはほとんど関係のない、ほんの一場面にしか出てこない脇役の人物の言動で解決する時もある。また、小説でなく、好きな作家のエッセイ集を読んでも同じように不思議な事は起こる。世の中の作家の人達は僕という人間に会ったことも無ければ、僕という読者がいることすら知らないだろう。それなのにどうしてか、その時どきの僕の心の辛さを心得ているかのような作品で応えてくれるのだ。『嘘だろう？』と思わず呟きそうなの確かさで、僕の完全に後ろ向きになった心のベクトルを『よいしょっ』と修正して、再び前向きに軌道修正する。そうして、そっと僕の背中を静かに押す。背中を押しながら止まってしまった僕が歩みを進めてくれる。そんな数々の言葉は魔法としか、説明がつかない。魔法の言葉達は著書の中、あちこちにちりばめられていて……。本の中で息を潜めて僕らを待たせてくれている。

僕は将来、何かしらの物を書く人になりたいと思っている。まだ漠然とそう思っているだけで何一つ具体的な事は決まっていないのだが。僕自身が力を言葉にもらってきたように、誰かの心にホッと温かい光を灯せるような作品を書き、必要としている誰かの元へ届けたい。日常生活の中で傷ついて、もう駄目だ、もう嫌だと思った日に手に取ってもらって、目に见えない心について傷を応急処置する救急箱のような存在を、創作し続けたい。

僕が尊敬する作家の先生は何人もいるのだが、中でも一番か二番に好きな先生が「誰が諦めても、私は最後まで『言葉の力』を信じます」と話した言葉が残されていた。僕はこの先生の作品どれもに、必ず温かい光を感じるのだが、それはただの偶然じゃなく、こういう考えを持った人物が書いたものだからなんだ、と納得できた。と同時に、この先生もきつと子供の頃、僕のように誰かの言葉に救われた経験があるんじゃないかなと感じた。

心の傷も、言葉の力も目で見たり、触ったりできない。匂いもしないし、もちろん味だっていない。人間が持ちうる五感をフル稼働させてもその実体を掴むことは難しい。けれど心の傷を癒えることはできない。心の傷で命を絶つ事だってある。命を絶とうと考えている人や、未遂の人も含めるともっと多いかもしれない。誰にも相談できなくて悩んでいる人にこそ僕は本を手にとってほしい。まだ出逢っていない途轍もない『力』を秘めた言葉がそこに沢山眠る。それらは読む人を待っている。悩みの無い世界や心に無傷の人達ばかりの世界は残念ながら存在しない。無い限り、言葉は僕らの傍で味方となりその『力』を発揮し続けてくれる。だから……読書を続ける僕の、『大事な言葉』達は日々、増加中だ。僕はそれが幸せで、嬉しい。